

はじめに

萩原朔太郎の生まれた土地は他人の手に渡り、建物の一部が前橋市に寄贈されたことで、敷島公園内に移築となったが、43年の歳月を経た平成29（2017）年4月、前橋文学館に近い広瀬川の畔に再移築されている。

ただ、残念なのは、せっかく移築された生家であるが、市民が無関心になっていることである。

人も寄り付かず閑散としているのが気になるが、これまで敷島公園内に長年放置してきた影響で、萩原朔太郎に対する市民の関心度が薄れたことが要因と思われる。

本来は、生家跡に母屋を復元するなり、「書齋」「離れ座敷」「土蔵」を改修して整備するのが基本であり、その土地に記念館として残すべきであった。それがまともな文化的景観を形成することになる。残念ではあるが、今になっては遅きに失した感がある。

そこで、朔太郎の生家がどのようにして現在の場所に移築することになったか、述べておきたいと思う。

当時、朔太郎の生家は関口林五郎氏が所有していたのであるが、昭和35（1960）年11月、「書齋」を前橋市に寄贈している。しかし、贈られて困った前橋市は桃井小学校校庭北東隅にとりあえず移築したのが初見である。

昭和43（1968）年8月、所有者代表の津久井幸子氏（萩原朔太郎の妹）は「生家の離れ座敷」を前橋市に寄贈するのであるが、行政は記念館として保存すべき計画をせずに、市の空地であった臨江閣敷地内北西部に移築している。

その間に、朔太郎の土地の所有者であった津久井家は、当時、隆盛を誇った前三百貨店に譲渡することになり、昭和43年12月、母屋の撤去がおこなわれている。

この時、前橋市が記念館を計画し、土地を買い上げておれば良かったという声は非常に多い。しかし、「土蔵」は撤去されずに残り、昭和47年9月に前橋市へ寄贈されることになるが、昭和49年に「離れ座敷」「書齋」とともに、人気の少ない敷島公園の林の中に移築している。

東京駿河台・主婦の友社に勤務する筆者の知人が前橋に訪れた際、萩原朔太郎の生家を見たいというので案内したことがあるが、「生家跡に記念館を整備しなくては意味がありませんね」と一言話されたことを記憶している。

その知人は文化県である山形の出身であるが、人の寄りつかない林の中に移築した生家を見て、感想を述べたわけである。ただ、前橋市民の多くは萩原朔太郎の名は承知しているが、詩に対する興味が薄いのも確かであった。

朔太郎は口語自由詩の確立者として、詩集『青猫』が不動の地位を得たと言うが、評価を得たのは後年になってからである。朔太郎の口語詩は、決して分かりやすいものではなく、難解なため、詩に興味のある人たちでも評価が分かれるところである。

前橋市は、館長に朔太郎の後裔（孫）にあたる萩原朔美氏（東京在住）を就かせ、文学館の再興を期待しているが、朔美氏は朔太郎の詩に意味はないと述べており、詩に意味がない

となれば、詩とは何なのかとなるが、記念館の入館者を増やすため、漫画家に依頼し、朔太郎の人生と重ならない内容のマンガが展示され、さらには、朔太郎が好んだという音楽と詩を結びつけた催しを企画しているのであるが、市民全体に浸透するまでには至っていないのが現状である。

元来、「前橋文学館」は前橋市出身の詩人を顕彰する目的で創られていたはずであり、萩原朔太郎や平井晩村・高橋元吉・萩原恭次郎・伊藤信吉など、同じ近代詩成立期に中心的詩行を残した資料展示を目的としていたのであるが、煥乎堂書店主催の「萩原朔太郎賞」が廃止となり、前橋文学館が引き継いだことから朔太郎の展示物が主軸となったように考えられる。その結果、本来あるべき文学館の企画機能が薄れ、郷土の文人たちは片隅に追いやられた感は歪めない。

前橋市の広報誌では、萩原朔太郎に集中した記事を毎号のように掲載しており、前橋文学館が掲げた当初の目的を逸脱しているのは確かである。従って、「萩原朔太郎記念文学館」と館名を変更すべき必要があるかと思う。

萩原朔太郎研究会会長・松浦寿輝氏は、広報誌（平成30年1月15日号）において、「朔太郎は郷土で複雑な思いを文学として表現しているが、前橋の皆さんは深い度量で見守ってください」と述べている。その言葉には、多くの意味が含まれていると考えている。

本書では、『詩人・萩原朔太郎の横恋慕』と題しているとおおり、口語詩から湧き出てくる朔太郎の内包された感情や、それにもなう詩の評価、あるいは、どのような精神の持ち主であったか、研究者や朔太郎の支持者が書かない内容をストレートに表現することに努め、足跡を辿ることで、実像に迫るものである。

2019年6月30日 大野 富次